

陸上競技研究紀要 第9巻

編集後記

平成25(2013)年度「陸上競技研究紀要」第9巻をお届けします。本号は、原著論文1編、「日本陸連科学委員会研究報告」の論文15編、「エキサイティング メディカル レポート」3編と「大会視察・帯同報告」2編、および本号から新たな企画として加えた特集「いま再び、ピリオダイゼーションを問う」から構成されています。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定し、本誌編集時には折しもソチ五輪開催中で、世の中は五輪応援ムード一色に盛り上がっていました。こうした国民の応援は、選手にとってもとても心強く、また励みになることでしょう。しかしながら、ときにそうした応援が過剰になっている状況も否めないところです。ひいきの引き倒しになっていると言うわけです。本来、冷静でありたい報道機関やスポーツ界の指導的立場の人ですら度を越す状況も垣間見られます。

それでは、スポーツ科学はどうでしょうか。こうしたムードと一線を画し、客観的な立場でいられるでしょうか。

トレーニング科学は、特に理論と実践の融合を強く意識しなければならない学問領域の一つだと言えましょう。しかしそこに、単純な因果関係で納得してしまう風潮はないだろうか。パフォーマンス向上を目論む故に、欲目で判断を誤ってしまう危険性がありはしないか。あたかも、節度を欠いた五輪応援のように。

今号では、そうした趣旨から「いま再び、ピリオダイゼーションを問う」というテーマで特集が組まれています。実践の立場から跳躍競技のピリオダイゼーションを紹介した吉田氏は、「トレーニング計画に正解はない、いろいろな試行錯誤から効果的方法を探して行かなければならない」と述べています。誠に、理論と実践の間を地道に粘り強く往復する努力が何より大切なことと思えます。

それは、本誌が一貫してめざしてきたことでもあり、読者とともに考えて行きたいテーマでもあります。是非、読者にはご意見、ご叱正を多数お寄せください。それをもとに、第二、第三の特集企画に活かして行きたいと願っています。

2014年3月1日

文責 伊藤静夫

陸上競技研究紀要第9巻 編集委員会

伊藤静夫(編集委員長)、榎本靖士(編集副委員長)、尾縣 貢
高松潤二、森丘保典、青山清英、高橋義雄、桜井智野風、安井年文、眞鍋芳明
(日本陸上競技連盟・事務局) 森 泰夫、佐藤峻一、額田 潤

「陸上競技研究紀要」第9巻

2014年3月1日発行

発行人 尾縣 貢

発行所 公益財団法人日本陸上競技連盟

〒163-0717 東京都新宿区西新宿 2-7-1 小田急第一生命ビル 17階

TEL : 03-5321-6580
